

Sherwood Anderson 研究

——*Poor White* におけるアイデンティティの探求——

小園敏幸

Poor White を執筆した動機について、シャーウッド・アンダスン (Sherwood Anderson, 1876—1941) は近代産業によって変貌するアメリカの町と、そこに住む人々の富と権力に対する夢を描きたかった、としている。⁽¹⁾

1920年10月に出版された *Poor White* は、Blanche H. Gelfant を初めとする多くの批評家たちによって、*Winesburg, Ohio* (1919) を除いたアンダスンの長編小説の中で最も充実した作品である、と考えられている。⁽²⁾

Poor White は内容から見て、三つの部分に分けられる。即ち、Book I と II は主人公ヒュー・マクヴェイの少年時代と、放浪の揚句、ビドウエルという町で、彼が有名な発明家になったことを物語る。Book III では、ビドウエル農場の娘であるクララの娘時代から大学時代への転換を物語る。Book IV, V, VI では、ヒューのクララへの求婚、結婚、そして不幸な家庭生活を経て、究極的に、彼らは愛と理解に基づいた和解による happy end を物語る。

この作品の最初の部分はマーク・トゥエインの影響が大きく、ミズーリ州ミシシッピー河西岸の“Mudcat Landing”のヒューの姿は Huckleberry Finn を思い起こさせる。⁽³⁾

ヒューの父親は若い頃は農夫であったが、ある製革所に職を求めて Mudcat Landing とさげすみ呼ばれているこの町に移ってくる。そこで結婚し、ヒューが生まれる。しかし、その製革所は1年か2年で倒産してしまう。ヒューの父親は大酒飲みになり、やがてヒューの母親は死ぬ。この怠惰な父親はヒューを連れて、河のほとりの小さな漁猟用の堀立小屋で生活を始める。

父親は町の通りや河岸のあたりを何をすともなく、ぶらぶらと歩きまわって日を送る。仕事が見つかり、ヒューがその仕事をやり、その間、父親は日向で横になって眠るのである。

14歳になったヒューは駅長のヘンリー・シェパードとその妻のセーラの家で生活するようになる。ニューイングランド出身のセーラにヒューは教育を受ける。

Sarah Shepard looked upon what she called Hugh's laziness as a thing of the spirit. "You have got to get over it," she declared. "Look at your own people—poor white trash—how lazy and shiftless they are. You can't be like them. it's sin to be so dreamy and worthless."⁽⁴⁾

セーラの精力的な精神におされて、ヒューはとりとめのない夢に耽ろうとする自分の性癖を、克服しようと努力する。彼は自分の属する階級の人たちは本当に劣等であり、社会人としての価値のない、除者にされるべき人間ばかりだということを信ずるようになる。

ヒューが19歳になった時、彼を後任にして駅長夫婦は、ミシガン州へ去って行く。やがて20歳になったヒューは東部での輝かしい将来を夢みて故郷をあとにし、旅費を労働でまかないながら、世間の男女と親しく融合し幸福を見つけ出すことができるような場所を求めて、町から町へと移って行く。3年後、オハイオ州のビドウェルという田舎町に流れつく。ここでは、電信技手の仕事をする一方、町の人々と親しくなりたいと思いつつも溶け込めない彼は、その淋しさをまぎらすために、発明のうちに自己を表現していく。

ヒューは物質的な成功を漠然とではあるが、よいことだと思ふような男に成長していく。やがて彼は農業機械の発明家になる。発明された品物は、町の物質主義の実業家たちの思わく通りに商品化され、ヒューは彼らの手中であやつり人形のようにあやつられていく。

彼の発明によって、かつての田舎町は次第に都市化していき、資本家・

労働者という身分階級が生じる。彼にはその功罪についての意識は極めて薄い。

こうした社会では、金が次第に支配的になっていき、同時に人間性は軽視されるようになる。

The money was an indication of superiority. There could be no doubt about that. ⁽⁵⁾

資本家は *Winesburg, Ohio* に於ける Tom Willard と同じレベルの人間で、所謂、物質主義者にすぎない。grotesque になる資質すら持ち合わせない恥ずべき生きものである。1916年の *Masses* の2月号に掲載し、後に *Winesburg, Ohio* のエピソード全体を集約する、いわば序章の役割を果たしている “The Book of the Grotesque” の中で、grotesque についてアンダースンは語っている。要約すると次の通りである。

「人間は成長するにつれて、多くの漠然とした思想の集成物としての真理を見つけ出していく。そして、自分に相応しい真理を見出し、それに執着して人生を過そうとした途端に、その人は grotesque になってしまう。」

中西部に於て、機械工業中心の資本主義の時代が台頭しつつあった当時、ヨーロッパの農本主義の時代から工業中心の時代への移行とは違って、その変化は余りにも急速であった。従って、過去の経験から割り出した真理に執着して生きようとする人間は身心が離反し、彼らは life を the life of reality と the life of fancy の二つのセクションに分割せざるを得ない。the life of fancy には道徳観念はない。

In the world of fancy, you must understand, no man is ugly. Man is ugly in fact only. Ah, there is the difficulty. ⁽⁶⁾

資本家たちは fancy の世界で生きるの必要性を感じていない人間であり、

資本主義社会機構のもとで自己疎外を意識しない人間である。資本家であるスティーブ・ハンター、トマス・パタワース、エド・フォールなどは「無気力者」(‘impotent’) にすぎない。

True maleness does not boast of its maleness. Only truly strong men can be gentle tender patient and kindly; and sentimental male strutting is perhaps always but an outpouring of poison from the bodies of impotent men.⁽⁷⁾

ヒューは有名な発明家ではあるが、長身でぶざまな手足をしており、その上セーラの言った“poor white trash”⁽⁸⁾を思い出して、とても impotent にはふるまえない。しかし、ヒューは物質的な成功を是認しており、grotesque ではないが、その要素を多分にたずさえている。

産業が勃興する以前、人々がまだ気違いじみた覚醒を経験しない頃は、中西部の町々はいずこも眠ったような町ばかりで、人々は昔ながらの職業を営み、農業をやり、商いをやっていた。しかし、ヒューが農業機械を発明し、更に今度は、石炭を積んだ石炭車を、鉄道線路から空中高くまでもちあげ、車を傾けて滑降路の中へおろす装置を発明したために、ビドウェルの町は益々活気をおびていく。

労働者は一日で稼いだ金で、一冬中自分の家を熱帯地方にいるような暖かさにしておくことが出来るようになる。石油が出る土地をもった百姓たちは、夜、寝床につく時には貧乏で銀行から借金までしている状態であったのに、一夜あければ大金持になっている。彼らは町に移住して、至る所に出来ている工場に投資をしたのである。⁽⁹⁾

ヒューは不格好で要領が悪く、いわば非社会的な人間であり、どこへ行っても他の人と心をかよわすことが出来ないけれども、ひたすら人間的なふれあいを求めている。ここにヒューが grotesqueness の要素を湛えた男であることがわかる。

いつしかヒューは女の優しさを求めるようになる。インディアナ州の農

場の娘との初恋は別として、ヒューと2人の女性との愛の姿は、彼という人間を知るうえで、また彼の identity の確立をもたらすうえで、大切である。

その1人はローズ・マッコイである。ヒューはローズをただ、遠くからあがめるべきで近づいてはいけない、少なくとも彼の方から近づいてはならない、清浄無垢の存在と見ている。ほとんどその全生涯を終えたマッコイ老婦人と、同じ家に住み生活を共にしてきたヒューとローズは、彼ら自身をそれぞれ人生の真実にふれさせようと弱々しい努力を重ねながらも、お互いの関係に於ては、決してある明確な線にまで到達することが出来ない。

“How could he care for me? How could a man like him care anything for a homely little school teacher like me?”⁽¹⁰⁾

とローズはヒューを愛しながらも心の中でつぶやくのである。ヒューはローズのことを“*She's a nice woman,*”⁽¹¹⁾と思いながらも、セーラに言われた“*poor white trash*”という言葉が思い出されて彼女に近づくことが出来ない。

“*She's a good woman. Remember, she's a good woman,*”⁽¹²⁾

“*Remember she's a good woman and you haven't the right. That's all you have to do. Remember you haven't the right,*”⁽¹³⁾

とヒューは心に強く言いかせるのである。

ヒューは幼い頃に母親と死別し、大酒飲みの父親に育てられ、ろくに学校へも行かなかったために、その影響からくる性格の弱さと歪みに加えて *poor white* であることがヒューを卑屈にさせている。

2人目の女性はクララ・パタワーズである。

ヒューはクララに対しても

“She’s a lady. what would she be wanting of me? I ain’t fitten for her. I ain’t fitten for her,”⁽¹⁴⁾

と思ひ込み、自分のような poor white には縁がないと心に決めてはいたが、自分には女性が欲しいのだと、クララが欲しいのだと思っている。

クララと都会の男アルフレッド・バクレイのことでスキャンダルがとんでいることに、ヒューは激怒し、彼女をふしだら呼ばわりする男を打倒して “She’s in trouble— here’s my chnce,”⁽¹⁵⁾ と思う。ヒューは意気込んでクララを訪問する。戸口を開けたクララに決然と求婚する。

“I came out here to ask you to marry me,” he said. “I want you to be my wife. Will you do it?”⁽¹⁶⁾

クララは戸惑いながらもヒューとの結婚を承諾する。

“Here’s my chance. This man is excited and upset now, but he is a man I can respect. It’s the best marriage I’ll ever have a chance to make. I do not love him, but perhaps that will come. This may be the way marriages are made.”⁽¹⁷⁾

ヒューとクララはその日のうちに郡役所に行き、結婚の手続きを済ませるが、彼の心の中にまたしても poor white が頭をもたげ、クララには近づきたい。結婚して一週間になるというのに、彼女はまだ彼の妻になっていない。

…when at last Hugh, shaken and ashamed, gave up the struggle with himself, she arose and went to her bed where she threw herself down and wept, as Hugh had wept standing in the darkness of the fields on the night before.⁽¹⁸⁾

ヒューにとってクララは彼の手の届かぬところにいる。

It did not seem to him that he could spend another night in the house with her, lying awake, hearing the little noises of the night, waiting — for courage. He could not sit under the lamp through another evening pretending to read. He could to go with Clara up the stairs only to leave her with a cold “good-night” at the top of the stairs. ⁽¹⁹⁾

ヒューは思い煩った揚句、一つの結論に達する。

The destruction of what was white and pure was a necessary thing in life. It was a thing men must do in order that life go on. As for women, they must be white and pure—and wait. ⁽²⁰⁾

決然としてヒューはクララに立ち向かう。漸く彼らは夫婦になる。

クララは結婚生活に一つの夢を抱いていたので、肉体だけを求めるヒューの態度に不満を覚える。彼女は、*Winesburg, Ohio* のエリザベスと同様に、結婚した相手の男に精神的安らぎを求めている。愛と優しさと理解こそ夫婦生活には必須の条件であるとクララは考えている。

クララにとって、機械と金に、所謂、物質主義に支配されている存在は男性ではない。結婚してから既に3年の月日が流れるのに、クララは結婚した相手の男が、まだわからないような気がして仕方がない。ヒューもクララの父親と同じように、物質主義のとりこになっている存在であるとしか考えられなくなって彼女は不満を覚えている。

“At any rate I have married me a husband and yet I have no husband, I have been in a man’s arms but I have no lover, I have taken hold of life, but life has slipped through my fingers.” ⁽²¹⁾

ヒューの内面にもクララのそれにも repression があり、2人の間には目には見えない壁が存在している。

There was a wall a blow could shatter, and she raised her hand to strike the blow. The wall was shattered and then builded itself again. Even as she lay at night in her husband's arms the wall reared itself up in the darkness of the sleeping room. ⁽²²⁾

ヒューには“poor white”という劣等感があり、クララには17歳の時に異性に無理やり抱きすくめられて接吻をされたという体験がある。これらが repression となって2人間の愛と理解を阻止している。更にクララにはヒューが同情から求婚したのではないか、という疑惑もある。

2人間の取り除けない壁を作っている原因はヒューが機械のとりこになっているためである、とクララは思っている。

クララは父親の愛用する自動車も含めて、機械文明時代に対して無意識的に反抗心を抱く。

Clara hated the machine and began to hate all machines. Thinking of machinery and the making of machines had, she decided, been at the bottom of her husband's inability to talk with her. Revolt against the whole mechanical impulse of her generation began to take possession of her. ⁽²³⁾

やがて、ビドウェルの町に機械文明による反逆が起こる。

ヒューが発明した農業機械に全財産を投資して大損をした馬具屋の主人ジョー・ウエイズワースが機械文明を礼賛する渡り職人の馬具屋ジム・ギブソンを殺し、資本家のステイブ・ハンターに重傷を負わせたのである。更にジョーはヒューの首に爪をたて、かみついたのである。

A sob broke from his lips. For a moment he (Joe Wainsworth) stood trembling with fright, and then turning, he for the first time saw Hugh, the man in whose footsteps he had once crept in the darkness in Turner's Pike, the man who had invented the machine by which the

earnings of a lifetime had been swept away. "It wasn't me. You did it. You killed Jim Gibson," he screamed, and springing forward sank his fingers and teeth into Hugh's neck. ⁽²⁴⁾

その瞬間に、ヒューもクララも変わる。

それまで思索家であったクララは、思索することをやめ、彼女の心に、木の根のように力強い、激しい、不屈の母性が目ざめる。彼女にとってはその時以後永久に、ヒューはもはや世界を改造する英雄ではなく、人生に傷ついたひとりの混乱した子供である。彼女の意識の中では、彼は二度と再び、その少年期から脱出することはない。

「私は無駄な労力をはぶく機械を発明し、みんなの苦労を軽減してやったのだ」⁽²⁵⁾という考えに、ヒューはしがみついていたが駄目である。もはや発明家であることを誇りにする男ではなくなっている。

クララは、ヒューを憎み、彼および彼のような人間の手にかかって滅び死んでいく過去に、共感しつづけ、昔流儀の手で仕事をすることを主張した馬具屋のジョーの姿、彼女の父親の冷笑と侮蔑をかった老人の姿、によって代表される過去に共感しつづける。

The bite of the man's teeth and the torn places on his cheeks left by the tense fingers and mended, leaving but a slight scar; but a virus had got into his veins. The disease of thinking had upset the harness maker's mind and the germ of that disease had got into Hugh's blood. ⁽²⁶⁾

“the disease of thinking” の病原菌がヒューの血の中へ入り、その瞬間からヒューは物質主義には従えなくなったのである。

ヒューはピッツバーグの駅で、エリー湖の岸辺で拾ったあざやかな色に光る小石を手の上に置いてその神秘に心をうばわれる。⁽²⁷⁾手の上の小石にあたっていたのと同じ光が、彼の心の中にもさし込みはじめ、その瞬間に、彼は発明家から詩人へと変貌する。精神的な革命が、その時に始まる。新

しい独立宣言が彼の内面に記されたのである。

“Standardization! Standardization!” was to be the cry of my age and all standardization is necessarily a standardization in impotence. It is God’s law. Women who choose childlessness for themselves choose also impotence—perhaps to be the better companions for the men of a factory, a standardization age.⁽²⁸⁾

ヒューは、自分のやってきたことは機械文明によって人間の主体性を奪い取られて「画一化」(“standardization”)された「無気力者」(“impotent”)を助長させてきたにすぎないと悟る。機械文明の力による人間の均質化こそ impotence を生み出すのだと悟ったのである。

ヒューは「機械が人間と人間の間に壁をつくっている」⁽²⁹⁾と気付くのである。

ヒューは発明家として成功し、物質的に安定した家庭生活を営むようになって改めて人生を考える時、ある種の葛藤、即ち精神内界の葛藤に悩まされるのである。自分はアメリカの物質文明や出世主義の化身であり、いわば産業主義の下僕にすぎないのではないかと考えるに至る。人間が人間として真に生きるとは一体どのようなことだろう、と考える。物質文明や出世主義こそ人間を規格化し、非人間的な人間をつくるのだ、と考える。産業資本主義社会機構の下で、何の疑念もなく時流に乗って人生を送ることが出来る人間は grotesque になる資格のない恥ずべき生きものだと思える。このような社会機構の下では時流について行けず外的現実と内的個我が乖離し、むしろ fancy の世界に閉じこもらざるを得ない innocence を持ち合わせた grotesque な人間こそ正常であり、愛と理解に基づく繊細な優しさによって人間は互いに意思疎通が出来る、とヒューは考えるのである。

ヒューは少年的感覚を回復し、クララは母性に目ざめ、それ故に2人は堅固に結ばれる。お互いに repression を克服し、innocence を復活させ、優しさで理解の上につきかれた真の愛を勝ち得たのである。

機械工業中心の資本主義社会に於ける物質主義の害悪に目ざめ, grotesqueness を超克して, やがて2児の父親になることを夢みるヒューの将来には明るい兆しをみる事が出来る。

Poor White の結末は, ヒューにとっては moratorium を終えて identity を確立させる正に人生の出発を意味している。

この作品のテーマは “Sherwood Anderson, Edith Wharton, and Thomas Wolfe”⁽⁸⁰⁾ の中で Blanch H. Gelfant が言っているように “personal dissociation and the failure of love” であろう。

人間が人間として真に生きるためには, 機械工業以前の牧歌的な社会の復帰を, 愛と理解による人間性の回復を, 主張しなければならない。

アンダスンが探求する世の中を, David D. Anderson はいみじくも次のように要約している。

In moving beyond rebellion Anderson became most clearly an idealist and a romantic. He believed firmly that somewhere a life based upon compassion, love, and understanding could be found, and he sought it in the past and in the towns, where man could live communally and close to nature at the same time, finding strength and mutual fulfillment in the process of living.⁽⁸¹⁾

ここに *Poor White* のモチーフを認める事が出来る。

Notes

- (1) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (North Carolina: Univ. of North Carolina Press, 1969), p. 66.
- (2) Blanche H. Gelfant, “Sherwood Anderson, Edith Wharton, and Thomas Wolfe,” *The American City Novel* (Norman, Okla.: Univ. of Oklahoma Press, 1954), p. 96.
- (3) Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (Cali-

- fofia: Stanford University Press, 1966), p. 124.
- (4) Sherwood Anderson, *Poor White* (New York: B. W. Huebsch, 1920), p. 12.
- (5) *Ibid.*, p. 214.
- (6) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969), p. 78.
- (7) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Notebook* (New York: Paul P. Appel, 1970), p. 153.
- (8) Sherwood Anderson, *Poor White*, p. 12.
- (9) *Ibid.*, p. 130.
- (10) *Ibid.*, p. 238.
- (11) *Ibid.*, p. 241.
- (12) *Ibid.*, p. 242.
- (13) *Ibid.*, p. 243.
- (14) *Ibid.*, p. 261.
- (15) *Ibid.*, p. 274.
- (16) *Ibid.*, p. 275.
- (17) *Ibid.*, pp. 275—276.
- (18) *Ibid.*, p. 314.
- (19) *Ibid.*, p. 322.
- (20) *Ibid.*, p. 322.
- (21) *Ibid.*, p. 332.
- (22) *Ibid.*, p. 332.
- (23) *Ibid.*, p. 334.
- (24) *Ibid.*, p. 357.
- (25) *Ibid.*, p. 367.
- (26) *Ibid.*, p. 369.
- (27) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story*, pp. 408—409.

Once, in one of my novels, "Poor White," I made my hero at the very end of the book go on a trip alone. He was feeling the futility of his own life pretty fully, as I myself have so often done, and so after his business was attended to he went to walk on a beach. That was in the town of Sandusky, in the state of Ohio, my own state.

He gathered up a little handful of shining stones like a child, and later carried them about with him. They were a comfort to him. Life, his own efforts at life, had seemed so futile and ineffectual but the little stones were something glistening and clear. To the child man, the American who was hero of my book and, I thought, to myself and to many other American men

I had seen, they were something a little permanent. They were beautiful and strange at the moment and would be still beautiful and strange after a week, a month, a year.

I had ended my novel on that note and a good many of my friends had told me they did not know what I was talking about. Was it because, to most Americans, the desire for something, for even little colored stones to hold in the hand now and then, to glisten and shine outside the muddle of life, was it because to most Americans that desire had not become as yet conscious?

Perhaps it had not but that was not my story. At least in me it had become conscious, if not as yet well directed or very intelligent. It had made me a restless man all my life, had set me wandering from place to place, had driven me from the towns to the cities and from one city to another.

In the end I had become a teller of tales. I liked my job. Sometimes I did it fairly well and sometimes I blundered horribly. I had found out that trying to do my job was fun and that doing it well and finely was a task for the most part beyond me.

- (28) *Ibid.*, p. 195.
- (29) Sherwood Anderson, *Perhaps Women* (New York: Paul P. Appel, 1971), p. 132.
- (30) Blanche H. Gelfant, *The American City Novel*, p. 96.
- (31) David D. Anderson, "Sherwood Anderson after 20 Years," Ray Lewis White, ed., *The Achievement of Sherwood Anderson* (North Carolina: Univ. of North Carolina Press, 1966), p. 253.